

# 生きた人形

小川未明

青空文庫



ある町の呉服屋の店頭に立つて一人の少女が、じつとそこに飾られた人形に見いつていました。人形は、美しい着物をきて、りっぱな帯をしめて、前を通る人たちを誇らしげにながめていたのです。

「私が、もしあのお人形であつたら、どんなにしあわせだろう……。なんの苦労もなしに、ああして、平和に、毎日暮らしていくことができる。そして、前を通る男も、女も、みんな自分を振りかえつて、うらやましげに見ていくであらうに……。」と、彼女は、ひとり言をしていたのでした。

このようすを、さつきからながめていた、この店の主人は、頭をかしげました。

「なんとという器量のいい娘さんだろう……。しかし、ようすを見ると、あまり豊かな生活をしているとは思われない。さつきから、ああして、人形に見とれているが、ものは相談だ。あの娘さんは、雇われてきてくれないだろうか？」と、主人は考えたのでした。

「もし、もし。」といいながら、彼女のかたわらへ寄つて、主人は、軽く、その肩をたたきました。

少女は、びつくりして、振り向きますと、主人が、にこにこした笑い顔をして立  
つていました。

「おまえさんは、さつきから、なにを考えておいでなさる？」と、主人は、やさしく問  
いかけました。

少女は、ちよつとはじらいましたが、正直に、

「もし、私が、このお人形であつたら、世の中の苦労ということも知らず、そのうえ  
こんなに美しい顔をして、どんなにか幸福だろうと思つていたのです。人間が、なん  
でも思つたとおりになりさえすれば、この世の中に、不幸というものはないと考えていた  
のでした。」と、答えました。

人のよさそうな主人は、けたけたと笑いました。

「お嬢さん、あなたのお顔は、この人形よりはよつぽど、美しくうごぎいますよ。も  
し、あなたさえ聞いてくださるなら、この人形の着物をあなたにあげて、そのうえ給  
金もさしあげますから、明日から、人形の代わりになつてくださいますか  
？」と、主人は、少女に向かっていいました。

「お人形の代わりにですつて？」

「そうです。生きた人形となつて、この店さきにすわつてくださるのです。」

「私が、お人形になるのでございますか？」と、少女は、黒い、うるおいのある目を大きくみはりました。

「そうしたら、どんなに、この店の評判となるでしょう。あなたは、たしかに、この人形よりは、幾倍美しいかしれない。」と、主人はいいました。

少女は、じょうだんでなく、ほんとうに主人が相談をしましたので、自分には、願いのあることでもありませんから、なにをして働くのも同じだと考えて、とうとう翌日から、この店の飾りをつとめる、生きた人形になることを承諾しました。

生きた人形が、店飾りになつたというわさが四方に広まりますと、町の人々は、みんな、一度それを見ようと前へやつてきたので、この呉服店の前は、いつもにぎやかでありました。

「なかなか美人じゃないか？」

「あの、青っぽい着物が、ばかに似合っている。」

こんなように、そこに立つた人々の口から交わされたのです。

「きつと、これから、生きた店飾りが流行することだろう……。」と、また空想

にふけりながらゆくものもありました。

いままで、客を前に集めた人形は、ただ美しいばかりで、笑うこともなければ、動くこともなかった。どうせ、お人形だというので、見る人たちも、それを要求するものはなかったけれど、これが、生きている人間だとわかると、中には、美しい少女に向かつて話しかけるものもありました。けれど、店の飾りとなつているうえは、だれとても、みだりに話してはいけないということになっていましたので、少女は、返事をしなかつたのであります。あまりおかしいときには、ついにつこりと笑うこともありました。そして、また体も動かさずにいられませんでした。

「なるほど、この人形は生きている！」といつて、いまさらのように感歎する人もあつたのです。

「やはり、生きているほうが、見ても張り合があつていいな。死んでいる人形では、つまらない。よく、考えついたものだな。」

こんなことをいって、ほめる男もありました。こういうふうには、昨日までの、ものをいわない人形は、どこへか隠されてしまつて、生きている人形の評判は、日にまし高くなりました。

少女は、夜になってから、店が閉まると、自分の宿へ帰りました。いろいろの人が、帰り道に声をかけました。しかし、少女は、心に願いがあつたので、気がしまつていましたから、けつして、よけいな言葉などはかわしません。さつさと道を歩いてゆきました。

ある月夜の晩のことです。少女があるいてゆきますと、うしろから自分を呼びとめるものがあります。それは、いつにないやさしい声であつたから、ふと立ちどまつてふり向きますと、おばあさんでありました。

「おまえさんには、青い色がよく似合うこと。ほんとうに、美しい娘さんだ。しかし生まれるはこの町の人でないようだが、どうして、この町へきましたか。知つた人でもおありなさるのかね。」と、たずねました。

少女は、おばあさんなので安心して、つい自分の身の上を語つたのです。

「いいえ、私は、まつたく一人ぼつちなのでございます。お母さんと二人で、家にいましたときは、どんなに幸福でしたか……。お母さんは、私をかわいがつてくださいました。お父さんのお顔を知りません。ごく私の小さいときになくなられたんですもの。そして、兄さんがありましたけれど、私の六つのときに、家出をして、そのちたよりがないので、

かわいそうなお母さんは、死ぬまで、兄さんは、どこにどうしているだろうといていな  
されました……。」「

おばあさんは、少女の話を月の下で、すこしも聞きもらすまいと耳を傾けていまし  
た。

「それで、おまえさんは、家なしになってしまったのですかい。」と、おばあさんはいっ  
た。

「家なしに？」

少女は、なんとというさびしい言葉だろう？　こういわれると、胸がふさがるように  
悲しかったのでした。なるほど、考えれば、もうどこにも自分の帰る家はない。ただこの  
うえは、ひとりの兄をどうしてもさがさなければならぬという、日ごろの願いに、気がひ  
きたったのです。

「お母さんがなくなられたので、私は、兄さんをさがしに、故郷を出しました。しかし、  
旅をしている間に、持っているだけの旅費を使い果たしましたから、この町で働いて、ま  
た旅をしようと思っっています。」と、答えました。

「それは、感心なことだ。けれど、あてもなく歩いたって、兄さんにめぐりあうことは、



むずかしいもんだ。」と、おばあさんはいった。

これを聞くと、少女は、月の下で、霜になやんだ弱い花のようにしおれてしまいました。

「おばあさん、どうしたら、私はこの世の中で、ただ一人の兄さんにめぐりあうことができるでしょうか……。」と、訴えたのです。

白髪頭のおばあさんは、考えていましたが、

「それは、方々の人の出入りするところへ行って、いろいろの人に、おまえさんの兄さんの話をして聞いてみなければ、わかりっこはないよ。私がいいところへつれてあげてから、明日の晩に、町はずれの橋の上について待つておいで……。きつとだよ。私は、おまえさんの身の上を悪くとりはからわれないから。」と、おばあさんはいいました。

少女は、しんせつなおばあさんだと思つて、その夜は別れて帰りました。

翌日になると、少女は、人形のかわりになつて、店さきでつとめるのも今日

かぎりだと思つと、町の景色を見るにつけ、なんとなく、もの悲しかったのであります。

呉服店の主人というのは、気軽なおもしろい人でした。少女は、自分の身の上を打ちあけて話したのは、おばあさんと主人の二人ぎりでしたが、主人はどうかして、

兄さんにあわしてやりたいと、蔭ながら心配してしまいましたので、新聞記者に話したものとみえて、このことが土地の新聞に載りました。すると、生きた人形の身の上話が、たちまち町の中にひろまったのでした。

ちようど、その日のことでもあります。青年が、呉服店へたずねてきました。

「私が、兄です。」といつて、少女に面会を求めました。けれど、彼女は、子供の時分に別れたので、兄さんの顔をおぼえていません。

「ほんとうに、お兄さんでしょうか？」と、少女は、美しい目で、じつと青年を見つめていました。

「なにしろ十年もたったのだから、忘れてしまったのに無理はない。けれど、僕には、雪ちゃんの小さな時分のかわいらしい姿が、ありありと目に残っているよ。」と、青年はいつて、

「僕も、覚悟をして家を出たのだから、りっぱな画家にならなければ、帰らないと思つていたのだ……。」と、語りました。そして、ふところから、お母さんの写真を出して、妹に見せたのであります。

「一日だって、お母さんのことを思い出さない日とてなかつた。」といつて、青年は涙

を落としました。

少女は、いま、彼をほんとうの兄だと信じて、疑うことができない。一時に、喜びと悲しみとで胸がいっぱいになって、張り裂けるようでありました。

「兄さん！ 兄さん！ ああ、私は、とうとう兄さんにめぐりあった。お母さん……なぜ死になされたの、お母さん……。」と、兄にすがりついたのでした。そして、もし、今日兄さんにめぐりあわなければ、晩には、あのおばあさんにつれられて、また遠く、どこかへいつてしまったであろう……と話しました。

「それは、片目の白髪のおばあさんじゃなかったかい？」と、兄は聞きました。

「片目だったかもしれない。たいへんにしんせつな……。」

すると、かたわらに、いつさいの話を聞いていた主人も、また兄もびつくりして、「あのおばあさんに、見こまれたら、どうしても逃げられはしないということだ。怖ろしいかどわかしのおばあさんなのだ！ 仲間が、幾人あるかもわからない。きつと船着き場の町へ、おまえを売るつもりだったろう。なんにしても、早くこの町から逃げ出さなければいけない。」といいました。

その晩のことであります。あちらには、港のあたりの空をあかあかと燈火の光が染めて

いました。そして、汽笛の音や、いろいろの物音が、こちらの町の方まで流れてきました。また一方は、はるかに、青黒い山脈が、よく晴れた月の明るい空の下に、えんと連なっていました。その広野を青い着物をきて、頭に淡紅色の布をかけて、顔を隠し、白い馬に乗って馬子に引かれながら、とぼとぼと山の方を指してゆく女がありました。

馬はだまつていました。乗っている人もだまつていました。そして、馬を引いてゆく人もだまつていました。ただ月の光に、あたりはぼうつと夢のようにかすんで、はてしもない広い野原に、これらの人たちは、絵のごとく浮いて見えたのです。

このとき、黒い人影が、その後を追ってきました。二人、三人、めいめい手に棒を持つてわめいてきました。とうとう彼らは、馬に追いつくと、行く手をさえぎつて、

「青い着物をきています。この女だ。もうけつして逃がしはしないぞ。」と、追つてきたものどもはいいました。

馬子は、たまげて、その人たちのようすをながめました。

「おい、この女をどこへつれてゆくつもりだ？」と、一人は、たずねました。

「この方は、おしでございませす。そして、今夜の中に、あの山のいたadakiのお寺までおつ

れもうしますので。夜が明けると尼さんにおなりなさるのだそうでございます……。」と、馬子は、答えました。

「まあ、いいから、ここから、馬を町までもどせ！」と、追っ手はせまりました。

ふたたび、月の明るい野原を歩いて、一行は、町はずれの橋の上までまいりますと、白髪のおばあさんがそこに立って待っていました。

「よく、私にだまつて逃げたな。」と、おばあさんは、怒つて、馬から女を引き下ろして、女のかぶっていた布を取りのけて、怖ろしい目で、顔をにらみました。

「え、これは、ほんとうの人形だ。私は、生きている人形をつれてこいといったのだ！」と、おばあさんは叫びました。みんなも、あつけにとられて、人形を見ました。

こうしている間に、ほんとうの少女は、もう兄さんといづくへか、この町から去った時分であります。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷発行

底本の親本：「未明童話集4」丸善

1930（昭和5）年7月

初出：「サンデー毎日 7巻49号」

1928（昭和3）年10月28日

※表題は底本では、「生《い》きた人形《にんぎよう》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：七草

2015年9月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 生きた人形

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>